OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ギメ美術館時代の今泉雄作
Author(s)	廣瀬, 緑
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 65-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53299
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ギメ美術館時代の今泉雄作

廣瀬　緑
フランス国立東洋言語文明学院（INALCO）ATER

キーワード
東洋学者地方学術会議　陰陽　易経　神道　悉曇
congrès provincial des orientalistes, Yin-Yang, Yi-King,
shintoïsme, sanscrit

はじめに
1　東洋学者地方学術会議における研究発表
2　仏教の経典に関する翻訳
おわりに

はじめに

1894年（明治27年）今泉雄作（1850-1931）は雑誌『国華』に「図案法序説」という論文を発表している。この図案法は東洋の原理に基づいて図案を法則づけようとしたもので，当時としては他に例のない極めてユニークなものとなっている。これについては，宮島久雄「今泉雄作の図案法」『デザイン理論』30号の中でかなり明らかにされている。従って今泉の経歴や図案法についてはそちらを参照していただくことにして，本稿では今泉がリヨンのギメ美術館でどのような研究をしていたのかを報告し，それらの研究内容を「図案法序説」を念頭に置きながら考察を試みたいと思う。宮島は「今泉雄作の図案法」の中で「かの地で学んだのが図案法ではなく古物学であったとはいえ，西洋の学問を学んだ者が非常に日本的な図案法を考えようとしたことは大変興味あることだといわなければならない。……図案をパターンやモチーフのレベルではなく，それを成立させる原理の点から考えようとしたことが今泉の図案法の大きな特徴であったと思われるのである。」[1] と述べておられる。確かに今泉のような例は，西洋の進んだ学問を学び，その成果を日本に持ち帰った他の明治の伝習生たちとは非常に異なっている。以下に見ていくが，今泉はフランスの中の東洋とも言えるギメ美術館のような特殊な環境の中に身を置き，日常は東洋の宗教に関する研究をし，それらの日本語あるいは中国語からフランス語への翻訳にあたっていた。そのため，ヨーロッパにおける当時の東洋学の現況を知り，

日本や他の東洋の国の哲学を違う角度から再発見する機会に恵まれていた。また，図案をパターンやモチーフのレベルではなく，それを成立させる原理の点から考えようとした点こそ，フランスの思考法の影響を受けていると思われるのであって，これは今泉がフランス社会の中で会議や発表を通して論理がいかに重要であるかを体得したためではなかったかと思われる。

1）東洋学者地方学術会議における研究発表

今泉雄作略年譜[2]によると，今泉は1877年5月31日に渡仏し，当初はリヨンでフランス語，ラテン語を学び，同年の8月からギメ美術館の東洋物品鑑定人になっている。1880年の *Annales du Musée Guimet*（ギメ美術館年報）に今泉の肩書きとして «lettré»[3] と記録されていることからも，主な仕事はギメから依頼された東洋の文献や資料の解読，そのフランス語への翻訳であったと考えられる。今泉がフランスで手がけた研究を最初に発表したのは，彼が28歳の時，1878年9月4日から7日にかけてリヨンで開催された «Congrès provincial des orientalistes»（東洋学者地方学術会議）[4] においてであった。

リヨンでの会議は4日間のプログラムで，東洋の宗教についての発表と質疑応答で構成され，第一日目がインドの古代宗教，二日目が中国の宗教，三日目が日本の宗教の三部から成り，最終日の四日目は会議のまとめとギメ美術館創立記念[5]の講演で締めくくられた。今泉は中国と日本の宗教の部で二日間にわたって合計四件の研究発表をしているが，特に中国の宗教の部では今泉の研究が三件も紹介され，会議における主題となった。

中国の宗教の部では，宣教師エーテル（M. E. Eitel）による «Le Feng-Shoui»（風水についての研究）が最初に発表され，それに続いて今泉の一件目の研究である «Etude critique sur Lao-Tseu»（『老子』についての考証）がギメによって紹介された。『老子』についての考証は，中国学者のスタニスラス・ジュリアン（Stanislas Julien）が1842年，既にこれをフランス語に翻訳していたが，ギメはスタニスラスの翻訳が決して間違ったものではないことを強調した上で，文法，翻訳の技術的な点から今泉に再検討を依頼したことを会議の席で述べた。例えば，『老子』の第四章で「道沖，而用之或不盈。淵兮似万物之宗」の訳をスタニスラスが «Le Tao est vide; si l'on en fait usage, il devient inépuisable.»（「道」というのはからっぽである。だからこそ無尽である。）と訳したものに，今泉は «Le Tao n'est jamais plein.»（その道が満たされることは決してない。）の意味を付け加えている。また，第十六章に記されている「万物」の訳をスタニスラスは «Dix mille êtres»（一万の生物）と文字を直訳しているのを，今泉は «Toutes les créatures»（全ての創造物）というようにその意味を訳している[6]。このような細かなニュアンスの違いは漢字の翻訳から来るもので，当時は東洋人でないと難しかった微妙な漢字の意味の訳を三十五章にわたって今泉が改定したものであった。

引き続いて会議では，パリ外国宣教会の Paul Perny の中国語に関する書物《Proverbes recueillis et mis en ordre»（ことわざ集）と Pierre Laffite の論文 «Considérations générales sur l'ensemble de la civilisation chinoise»（中国の文明についての総合的考察）が司会者のコーディエール（Cordier）とギメによって手短に紹介された後，今泉による二件目の研究が発表された。テーマは «Des croyances et des superstitions des Chinois avant Confucius»（中国における孔子以前の信仰と迷信について）というもので，フランス語への翻訳はその頃リヨンにいた富井政章[7]（1858-1935）が行い，口頭発表も今泉に代わって富井が行った。発表の内容はおおよそ以下のようなものである。

「中国古代の宗教は，紀元前2714年頃，黄帝以降，尭，舜，禹の治世下において天上の最高神である天帝，祖先神，山や森や水の精霊など自然神への感謝から成り立っていた。紀元前1763年湯王が夏王朝を滅ぼし，殷の時代になってからも信仰は受け継がれたものの，農業の発展のために雨乞いの祈りが次第に重要視されるようになって，そのような祈祷が個人的な願いをかなえることにも応用されるようになり，まじない的なものが信仰されるようになった。次の周の時代になってから，こうした民間にはびこる迷信を一掃するために，武王とその弟の周公旦が以前のように先祖崇拝を再び重要視し，細かな儀式の法令を定めることによって封建制度を確立するに至った。しかし，周も中期の春秋時代になると北方から蛮族が南下して，いくつもの小国が争う無秩序な戦国時代となり，家族連帯の意識が薄れ宗教意識が衰えるようになっていった。孔子は周時代の封建制の精神への復帰を理想とし，家族道徳の強化に努め，先祖崇拝と天を敬う道徳による政治を強調した。紀元前221年，次の秦の始皇帝の時代には皇帝自身も不老長寿を求めるなど再びまじない的なものが興隆し，この頃から廟において儀式を行う宗教が現れるようになった。」[8]

この発表の内容は今泉が中国古代の神話研究の基礎資料である『史記』，『山海経』，『経書』，『周礼』，それに戦国時代の楚国の歌謡である『楚辞』などをもとにまとめたものと思われる。今泉は1866年，16歳の時に昌平坂学問所で学んでいる。そこは江戸時代から続く漢学，儒教の教育の中心の場であった。また今泉自身も1868年から漢学を教授しており[9]，日本で学んだこれらの知識はこの発表で大いに生かされたものと考えられる。発表後の質疑応答では，キリスト教的な立場から，中国人に天国と地獄という概念が存在しなかったのは信じがたいといった意見や焚書坑儒によって秦時代以前の資料は多く存在しないので古代中国の歴史は明確ではないことなども指摘されたが，ギメは，今泉が中国文学の資料を丁寧に調査し，中国の宗教が天帝，祖先神，自然神など日常生活において利益をもたらしてくれるものへの感謝，つまり現

世利益を求める徹底した現実主義にあるということを科学的に証明した点を高く評価した。

この後，他の研究者のいくつかの書物と論文の紹介の後，再び今泉の三件目の研究が発表された。テーマは «Du culte des ancêtres en Chine sous la dynastie de Tchou»（中国周王朝における先祖崇拝についての研究）で，その内容は二件目の発表をさらに発展させ，周王朝の先祖崇拝の儀式の方法について詳細に調べたものである。文はかなり長いので全部を紹介することはできないが，発表の内容から周時代の先祖崇拝の儀式は非常に細かな点まで決まりがあって複雑であることがわかる。礼の国中国では，先祖を祭る儀式や葬儀においては特に物の数や動作の回数に厳正なルールがあり，それらは偶然に決められたものではなく，中国の聖数思考に則っている。そしてこの聖数思考は同じ周の時代に武王によって書かれたと伝えられている易の理論の経典である『易経』から来ている。発表の内容はおおよそ以下のようなものである。

「先祖崇拝の儀式の規則は身分によって異なる。皇族のレベルでは九つの廟を設け，一つ目の廟には一代目の先祖の位牌を，他の八つの廟にはそれぞれ両親，祖父母，高祖母の位牌を祭る。祭りは年四回催され，春には全ての廟を祭るのに対し，他の季節は一代目の先祖の廟において他の先祖もまとめて行われる。儀式の日取りが決まると，皇帝と皇后は七日間いっさいの娯楽，肉食，酒を断ち，別々に生活し，続く三日間はさらに厳しい禁断生活を行う。この十日の間には，儀式のために先祖の代わりを演じる者が選ばれるが，たいていは皇帝の子供がその役に当たった。儀式の当日の朝，皇帝と皇后は儀式の衣装に着替えるが，その衣装は赤と色とりどりの色からなっており，それぞれ太陽，月，二つの星座，二つの山，二匹の龍，二羽の雉を象徴する模様がほどこされたものであった。夜が明ける前に儀式を取りまとめる役人は音楽隊と六十四人の踊り子を率いて中庭に整列させておき，歌手と琴の演奏者は合図によってすぐ演奏できるように廟の中に待機させておく。夜が明けると音楽が鳴り出し，皇帝の行列は廟へ進んでいく。」

ここまでの内容から，この儀式が易の聖数思想に基づいていることがよくわかる。廟は九つ建てられているが，易では九が老陽[10]を示すことから尊ばれたためである。また儀式の衣装の模様などは全て二つずつ対になっており，これは陰陽思想に基づいている。また，待機させる踊り子の数は合計六十四人となっているが，これは天地の現象を六十四卦の中に託した八卦が基になっている。

「皇帝は廟に向かって左側から，皇后は右側から進み，その後を皇帝の家族がついて行き，儀式の酒を持つ役人，後に供犠のための牛を連れてくる役人，お供え物を持つ役人，そし

て一般の役人が続いて廟へと進む。そこで行列はしばらく座ってから再び廟に向かうが，皇帝は左側の階段を，皇后は右側の階段を上る。この時，先祖の代わりを演じる子供は真ん中の階段から進み，廟の奥に入り座る。皇帝は青銅器の杯を手に取り，役人がその杯に薬草酒を注ぐと，それを地面に撒き散らし，皇后と共に先祖の祭壇の前に立つ。この時音楽が鳴り止み，役人の一人が祭壇の下で木簡に書かれた文章を読み上げる。これは皇帝が先祖に儀式を受け入れてくれるよう願う祈りである。これが終わると，役人が供犠の牛を外から連れてきて，門のところで皇帝と皇后に引き渡す。音楽が再び鳴り出し，中庭の左にある柱に役人が牛を結び付けると，皇后は廟の左側の階段から下りてきて，牛の正面に立つ。役人が牛の手足を縛り終えて「ソウ」と呼ばれる銅でできた四角い大きな桶に牛を入れると，皇帝は刀を携えて牛のところまで来て自ら牛を殺す。」

皇帝が左から進み，皇后が右から進むというのも陰陽思想に基づいているが，一般に左が上席であるという決まりがある。儀式などで左右のどちらを選ぶかは『老子』の三十一章などにも記述があって，一般にめでたい席では左が上席とされている。しかし，その後牛を殺す場面では，凶事になるため皇后が左から下りてくるというように位置が逆転している。

「皇帝は皇后と共に廟の中に入り，右手にあるテーブルの上の翡翠の杯を取って自らを洗い清め，係りの役人はその杯に酒を注ぐ。杯が酒で一杯になると皇帝はそれを廟の中にいる先祖の役の子供に捧げる（以下先祖と称す）。このようなことが何度か繰り返された後，役人は桶の中の牛と別に殺した羊と豚を持ってきて並べる。皇帝はその間，左側のテーブルの上にある翡翠の杯に酒を注ぎ先祖に捧げ，自らもそれを飲む。皇帝の家族，官吏らも廟に入って来てこの酒の儀式に参加する。続いて，九つの大きな銅の甕の中に，様々な種類の鳥や動物の煮たものを入れて先祖に捧げる。皇帝は右側にあるテーブルの上の杯を取り，酒を満たして先祖に捧げる。これが返され皇帝がそれを飲むと皇后も続いてそれを飲み，年老いた順に両親にも杯が渡される。そこでまた，魚や鳥，スープなどが盛られた銅の甕が運ばれ，野菜や果物は竹の入れ物に入れて捧げられる。酒を飲む儀式は総理大臣，その妻なども参加して繰り返し行われ，先祖が九回酒を飲み終わった時にようやく酒の儀式が終わる。そして六十四人の踊り子たちが一斉に縦横八列にならんで踊りを披露し，先祖に捧げた食べ物は皆に振舞われて儀式が終了する……」[11]

ここでも陰陽に則って杯は左と右に配置され，場面によって使う杯は異なっている。九という数字は重要で，先祖には九回酒を捧げなくてはならない。またお供えを盛る甕も九つ用意さ

れる。八という数字も中国では非常に大事な数字で易の八卦に由来しているが，六十四人の踊り子は縦横八列に並んでいる。今泉による儀式についての発表は，ここで終わっておらず，儀式が中止になる時について，領主のレベルでの儀式の方法について，市民のレベルの儀式用の土地の分配法まで及んでいる。この土地の分配方法にも尺度の決まりがあるので，その内容を少し述べると，

「集落の人口は八つの家族を一グループの単位として成り立っている。このグループに与えられる土地は九つに分けられ，そのうちの八つがそれぞれ八家族に分配される。余った一つ分の土地はさらに十等分され，再びそのうちの八つが八家族に分配される。残った二つ分の土地はそれぞれ四つに分けられ，すなわち八つ分の土地になる。この八つ分の土地はそれぞれ八家族に分けられるが，この土地は家族の中にいる老人のために野菜を育てたり，鶏を飼ったりするため，そして祖先崇拝の儀式に当てられる特別な土地である……」[12]

ここで述べられているグループや土地を八等分する方法も『易経』の八卦に基づいていると考えられるが，同じように物を八等分する例は『図案法序説』の第三図，「高の規矩」に関する章でも述べられている。その中で，今泉は「雄按スルニ此法ハ八曲尺ト稱シテ茶家者流竹ノ花筒ヲ切ルニ此法ヲ用フ竹ノ圓周ヲ量リ其長ヲ八除シテ其長ヲ定ムル……」というように竹の円周の長さを八で割ることによって長さを割り出すと述べている。この茶道に使われる尺度（道具規矩）は，足利時代頃より起こり，その本をただせば中国の周の時代に形成された『易経』の八卦に由来しており，易がその理論のもとになっていることは『図案法序説』の中でも繰り返し述べられている。『易経』の内容そのものは占いの結果である筮竹の組み合わせが何を意味しているのかを記したもので，その解釈は非常に難しい。また，『易経』の中には「陰陽」の二元論，「尺度」のもとになったと思われる聖数思想や八卦の他にも易の三義として「易簡」「変易」「不易」が掲げられている[13]。この三義と似たようなことがらも，「図案法序説」の最初で述べられている。それは「新ニ圖案ヲ為スハ變化ヲ主トス若シ變化ナケレハ圖案ノ用無シ」と述べている箇所で，ここで述べている「変化」というのは図案は新しいものでなくてはならないということだが，宇宙の森羅万象に変化しないものはないと考える「変易」に一致する考えである。この「変易」あるいは「変化」は易においては重要なことがらで，「周易繋辞下伝」の中で易の原理は行きづまれば変じ，変ずれば通じ，通ずれば長く続くとされていること[14]や陰陽はいつまでも陰や陽というように固定した二物ではなく，天地の間にあるいは陰となりあるいは陽となって変化する作用をなすものがあり，この法則を指して道としたことに基づいている[15]。また，図案法の中で「道具規矩ノ妙善ク一定ノ規則有ツテ無量ノ変化ヲ出シ

無量ノ変化有ツテ又規則ニ外ナラス」と述べられている箇所は，そうした無限の変化の現象の中にも，星の運行や四季の変化のように，変化しながらも運行そのものについては一定の法則があるとする「不易」に一致しており，これらの図案に関して述べられていることがらは易の三義に基づいた哲学であると思われるのである。

このように三つ目の研究発表は，今泉が既に周の時代の先祖崇拝の方法を通して『易経』に関心をもっていたことを充分うかがわせる内容となっている。会議の席で今泉は儀式の方法についてのみ取り上げており，その数の法則や『易経』そのものについては述べていないが，『易経』と物の造形は深い関わりがあることは「周易繋辞上伝」中にも記されており，後に今泉が易の法則と図案法を結びつけるようになったことも納得がいく。それによると「易には聖人の道が四つある。自分の所見を言おうとする者は，易の辞句を尊重して言い，実際に行動しようとする者は，易の変化を尊重して行動し，何かの器物を制作しようとする者は，易の卦の像を尊重して制作し，卜筮によって未来を占おうとする者は，易の占断を尊重するべきなのである。」[16] と記されている。また，中国古代の礼書で西周王朝の行政組織を記述した『周礼』にも，これらの数の法則が儀式だけではなく，さらに建築，都市設計[17]，工芸[18] にまで及んでいることが記されている。そして，その影響は日本にも及んでおり，例えば藤原京も『周礼』をもとに都市設計されたとさえ言われている。このようなことから易は占いだけではなく，中国を始め極東における図案の分野にとっても計り知れない影響を与えているものと言えるだろう。

さて，翌日三日目に行われた日本の宗教の部はバラエティに富んだ構成で，神道，仏教，日本の文字について発表が行われた。今泉は «De la religion shintoïste»（神道について）と題する研究を発表しているが，内容はおおよそ以下のようなものである。

「天之御中主神はこの宗教の唯一の神で，永遠で，目にみえず，物質的形態がなく，また絵に描かれたりしたこともない。天之御中主神は基本的に二つの特性を持ち合わせており，一つは高御産巣日神でもう一つは神皇産霊尊である[19]。高御産巣日神は目に見える全ての物質的なものを司り，神皇産霊尊はその物体に生命を吹き込む力を持っている。……神道は魂を二つの特性に分けている。それは「ふゆみたま（ママ）」[20] と

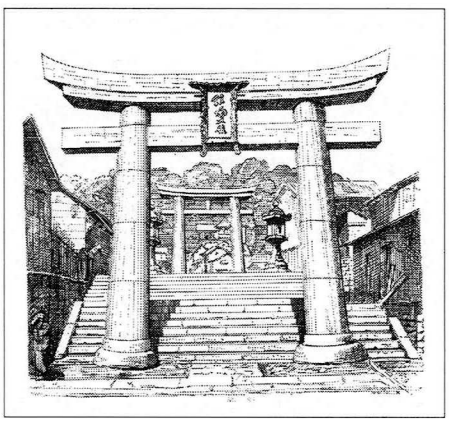

図1　Entrée d'un temple shintoiste（神社の入口）
«De la religion shintoïste» の挿絵。
Congrès provincial des orientalistes（1878）

「あらみたま（荒魂）」で，「ふゆみたま」は善の要素，「あらみたま」は悪の要素を示すものである。驚くことに，この二つの要素はペルシアのゾロアスター教における善の神アフラマズダ（Ormuz）と邪神アフリマン（Ahriman）によく似ている。しかしペルシアでは，善は常に悪を滅ぼすが，日本では「ふゆみたま」と「あらみたま」は常に同時に存在し，「ふゆみたま」は「あらみたま」を支配するだけに止まらなければならない。神道における全ての倫理はこの二つの要素の概念に由来している。……また，神道においては何よりも清浄が尊ばれる。神を祀るためには，魂の穢れを取り除かなければならない。神道にはカトリックでいうところの「告解」[21] はなく，罪を犯した場合には，自ら反省し良い行いをするように努める。これも魂に呼びかけると同時に天之御中主神を念頭に呼びかけるのである。…」[22]

以上のように今泉は神道についての基礎的な内容を紹介しているが，特に高御産巣日神と神皇産霊尊，「ふゆみたま」と「あらみたま」，清きと穢れというように，神道に見られる二元論を強調した内容となっている。

2）仏教の経典に関する翻訳

東洋学者地方学術会議での発表の他に，今泉が行った研究としてはサンスクリット語からフランス語への翻訳である «Shidda» と『般若心経』，中国語からフランス語に翻訳した『阿弥陀経』がある。前掲の今泉雄作略年譜によると，今泉は1878年頃からサンスクリット語を学んだとあるが，«Shidda»，『般若心経』の翻訳の準備のため，そして仏教の経典の原文との対比研究のために学んだものではないかと思われる。また，今泉は1879年2月3日から7月の末まで，原田[23]，山田[24] と共に三人で日本語の指導も行うようになっていた[25]。1880年の研究から今泉は一緒に日本語を教えた山田という人物と共に翻訳を発表するようになっている。その一つが «Shidda»（悉曇）[26] と題するもので，1880年の *Annales du Musée Guimet* にその内容が掲載された。シッダとは本来「完成せるもの」という意味で，狭義にはサンスクリットの

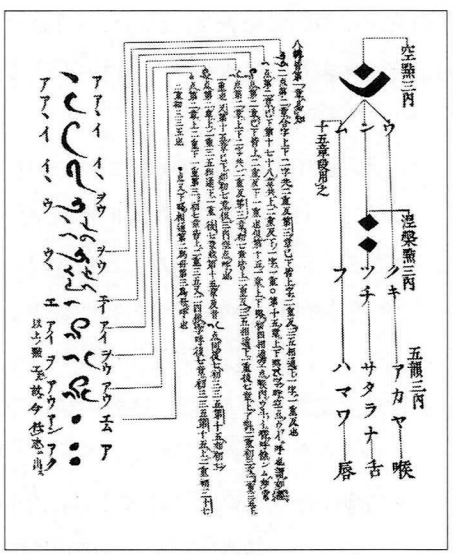

図2　ギメが日本から持ち帰った写本 «Shidda» の一部。
Annales du Musée Guimet, 1880.

母音文字を指し，広義には母音を伴って発音される子音文字及びそれらの合成字も含まれた。従って題名の «Shidda» は全体としてサンスクリット文字，悉曇文字を意味する。原文資料はギメが日本を訪れた時，名古屋の長栄寺の僧侶から贈られたもので，かつて見習い中の僧が教えを受けるのにふさわしくなかったので罰として写させたサンスクリット語の原稿の写本である。今泉は1894年『国華』55号に掲載した論文「木筆考」の中で「余佛國ニ在リシトキ此迦羅忙ニテ書シタルサンスクリツトノ筆畫ヲ模シ得タリ……」と述べており，フランスにいた時から既にサンスクリット語の字体にも関心を持っていたようである。さて，この写本であるが，最初にサンスクリット語の成立に関する四つの説明が箇条書きされている。一つ目に書かれている内容は，弘法大師の書物『梵字悉曇字母並釈義』によるもので，サンスクリット文字の成立はブラフマン（梵天）が天から地上に降りてきて47種のサンスクリット文字を作ったことに始まり，それらが後に改良されて多くの文字が作られたということ，唐の僧智広の『悉曇字記』によると今日までもたらされているサンスクリットの発音はインド南部の発音がもとになっていると記されている。二つ目は釈迦の経典の中には様々なサンスクリット文字の意味を記したものがあり，その一つとして『華厳経』の中には42種のサンスクリット文字の意味を見出すことができると記されている。三つ目に書かれていることは大乗仏教の経典とサンスクリット文字についてで，それによると釈迦の死後五世紀頃，小乗仏教が盛んになって，大乗仏教の経典は竜の国（Monde des Dragons）にもたらされた。それから二世紀後，インドの僧である竜樹菩薩（150-250 ?）が竜の国に行き，その経典を全て授かり大乗仏教の基礎を築いた。これらの経典の中に四つの特別なサンスクリット文字の母音が含まれていたというものである。四つ目に記されていることは大日如来による『金剛頂経』と『大日経』の中にサンスクリット文字の神秘的な意味について説明があるというものである。これら四つのサンスクリット文字の伝説に続いて，サンスクリット文字の母音，先に述べた四つの特別な母音，35個の子音，文字の合成の規則，母音の短縮形などについて細かに解説されている。この写本からは経典の意味をはじめ曼荼羅など仏教美術の工芸品を良く理解するためにもサンスクリット文字を学ぶことは必須であったことがわかる。

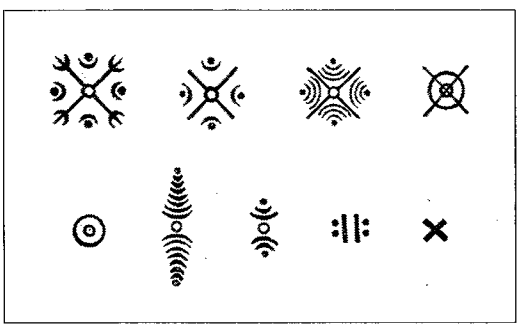

図3　«Shidda» の中で紹介されている図案のようなサンスクリット文字。図は Nirvâna（涅槃）を意味する文字から派生したもの。*Annales du Musée Guimet*, 1880.

『阿弥陀経』の翻訳については，日本に伝えられていたサンスクリット語の『阿弥陀経』が，その頃イギリスに留学していた南条文雄[27]（1849-1927）の尽

力を得て，インド学者の Max Muller（1823-1900）によって1880年初めて英語に翻訳されたことが知られている。しかし，これとは別に1881年今泉と山田によって鳩摩羅什（344-413）[28]による中国語の『阿弥陀経』がフランス語に翻訳され，同年の *Annales du Musée Guimet* に掲載されている[29]。また，『般若心経』，正式には «Prajñāpāramitā-hrdaya-sūtra»『摩訶般若波羅蜜多心経』（般若波羅蜜の心髄たる経典）の翻訳については，1883年オランダのライデンで開催された国際東洋学者会議録[30]に掲載されたものがサンスクリット語からフランス語への初めての翻訳であるとされている。これもほとんど知られていないが，今泉とリヨン大学助教授の Paul Regnaud が共同で翻訳したものである。『般若心経』は大乗仏教の根本である「空」の思想，「六波羅蜜」[31]，「回向」[32]，「三昧」[33]において仏教を知るための重要なテーマが数多く取り扱われており，ヨーロッパにおけるその後の仏教研究者へ与えた功績は大きかったと言える。

おわりに

今泉がリヨンに行った1877年（明治10年）頃の日本は文明開化が叫ばれていた頃で，儒教的な考えが批判され個人の自由や権利を主張する西欧の啓蒙思想が普及しつつあった。しかし，これらの西洋哲学が日本に入ってくる前は，陰陽の概念や五行説などが日本の哲学の中心であった。それらがフランスでは古いものとして捉えられるのではなく研究対象として捉えられたため，今泉はリヨンにおいて東洋の思想を違う角度から学ぶ機会をもった。東洋学者地方学術会議で今泉は，自身の発表はもちろん，他の発表者の研究も含めて東洋思想の根本である陰陽思想，先祖崇拝，易といったものを強く再認識し，それらが西洋との違いであり，東洋文化を形成している精神であると悟ったに違いない。

帰国後の今泉の研究論文にはほとんど西洋美術について述べたものが見られないのだが，その頃，特に明治20年代前後は外務卿井上馨の欧化政策によって生活の洋式化が奨励され鹿鳴館時代と呼ばれていた。ヨーロッパ文化の中心国とも言えるフランスに伝習生として送られた今泉がフランス語，ラテン語，サンスクリット語，漢文など東西の言語や思想を学び，結果としてヨーロッパ文化の移植による欧化には同調せず，東洋の思想に基づいた美学を構築しようとしたことは，今の我々にとっても西洋化と近代化は果たして同じことだったのかと考えさせられる。この今泉の思考と当時の日本の時代とのずれは，今泉が日本を出て東洋の伝統的なものに価値を見出し，それをもとにしようとした歴史的垂直思考であるのに対し，明治の日本ではむしろそれを否定し，新しい西洋のテクノロジーや文化を導入することによって近代化を進めようとした地理的水平思考であったという価値観の違いにある。従って明治時代はジャガード織機や軍艦に関心は持っても，ローマの遺跡だとかルネサンスの教会とか，西洋の精神を担うものにはあまり関心が向けられなかった。しかし，デザインにとって技術以上に重要なのは

物の見方や捉え方からくるアイデアなのであって，それはしばしば歴史の中に隠されている。今泉はそれに気が付いたのであった。

日本の美学の歴史を振り返ってみると，理論に触れた書物としては『花伝書』『南坊録』『君台観左右帳記』など数えるほどしかない。そうした点からも今泉が1894年に「図案法序説」で構築しようとしたことは，東洋の哲学に基づいて美学理論を完成させようという真に大きな試みであった。残念なことに「図案法序説」は未完のままであるが，そのような試みがなされた要因の一つは，もちろん今泉が日本で漢学を学んでいたこともあるが，フランスで東洋思想について研究したことが原動力の一つになっていると言えよう。特に中国西周時代における先祖崇拝についての研究は，その後今泉を『易経』と図案法を結びつける方向へ導いたものと考えられる。「図案法序説」を発表した頃（1894年）は，欧化主義の反動から日本の伝統美術が再び尊重され，岡倉天心らの考えが当時の美術工芸界で指導的になっていた。しかし，そういう時代の傾向の変化とは別に今泉自身の信ずるところ，つまり歴史の中で日本美術の独自性について考察し，他の文化との違いを認め，さらにそれらを体系的に理論づけるという一貫した研究姿勢に西洋の美術と対等に向かおうとする真の近代化を見出すことができるように思う。

そういう意味では，日本の図案の歴史にとって今泉雄作は非常に重要な人物であったと言え，今泉についての研究は今後の課題が残されていると言えよう。

註

1 宮島久雄：「今泉雄作の図案法」『デザイン理論』No. 30，1991，p. 88，意匠学会，京都。

2 宮島久雄：前掲論文 p. 99。

3 lettré は一般に博識の士という意味で，今泉が中国や日本の古文書について精通している者という意味で lettré と記されたと考えられる。

4 東洋，アフリカ，オセアニアに関する学問のフランスの地方都市における発展を目的として設立。1874年パリの郊外 Levallois で開催された第一回の会議では日本語教師の Léon Rosny が中心となり，日本研究に関しては文学がテーマとなった。1878年の会議は第三回目にあたり，ギメが中心となって前半は 8 月31日からサンテチエンヌで，後半は 9 月 4 日からリヨンで開催され，リヨンでの主題は東洋の宗教に集中された。

5 ギメ美術館が一般公開されたのは1879年 9 月30日であるが，1878年 9 月 7 日には Inauguration du Musée oriental として Guimet, Baron Textor de Ravisi, Caillemer の 3 人によって美術館創立についての講演が催された。

6 M. Ymaizoumi: «Etude critique sur Lao-Tseu» p. 53, Religions de la Chine, *Congrès provincial des orientalistes,* tome II, Session de Lyon, 1878. 現代語訳は金谷治『老子』講談社学術文庫（2003年）に

拠った。

7 現行民法典の起草にあたった民法学者。東京外国語学校在学中の1877年フランスへ留学，83年エクス・オン・プロヴァンスで法学博士の学位を得て帰国した。

8 M. Ymaizoumi: «Des croyances et des superstitions des Chinois avant Confucius» pp. 56-61, Religions de la Chine, *Congrès provincial des orientalistes,* tome II, Session de Lyon, 1878,（筆者訳）.

9 宮島久雄：前掲論文，p. 99。

10 易では老陽を九，少陰を八，少陽を七，老陰を六としている。九と七は老陽と少陽として特に尊ばれた。（世界大百科事典，平凡社）

11 M. Ymaizoumi: «Du culte des ancêtres en Chine sous la dynastie de Tchou» pp. 68-74, Religions de la Chine, *Congrès provincial des orientalistes,* tome II, Session de Lyon, 1878,（筆者訳）.

12 M. Ymaizoumi: «Du culte des ancêtres en Chine sous la dynastie de Tchou» p. 77,（筆者訳）.

13 高田真治，後藤基巳訳：「易の名義」，pp. 11-13,『易経』上巻，岩波文庫，2002年。

14 高田，後藤訳：「周易繋辞下伝」p. 258,『易経』下巻，岩波文庫，2003，易における「変化」については「周易繋辞上伝」「周易説卦伝」の中でもしばしば述べられている。

15 高田，後藤訳：「陰陽思想」pp. 40-41,『易経』上巻，岩波文庫，2002年。

16 高田，後藤訳：「周易繋辞上伝」p. 239,『易経』下巻，岩波文庫，2003年。

17 『周礼』考工記の匠人の条による都城は9里四方の方形で，四周にはそれぞれ3門ずつ門が開かれ，また城内には南北と東西に9条ずつ道路が通じ，その道幅は車のわだちの9倍である。このような例としては三国の魏の当初の首都であった噸城があげられる。

18 青銅器鋳造の際の銅と錫との比率を用途別に六つに区分するなど，礼数（すなわち礼の規定を等差級数的に段階づける）の観念による概念化がある。（世界大百科事典，平凡社）

19 『古事記』上巻，「日本書紀」巻一によれば天地開闢の時に高天原に成った三神。

20 にぎみたま（和魂）の事を指すと思われる。

21 confession：カトリック教会で，洗礼を受けた後に犯した罪を，司祭を通して神に言い表す行為。

22 «De la religion shintoïste» pp. 115-118, *Congrès provincial des orientalistes,* tome II, Session de Lyon, 1878,（筆者訳）.

23 原田輝太郎：レオン・デュリーにフランス語を習い，日本では後に陸軍大佐となった。

24 尾本圭子，フランシス・マックワン共著 *Quand le Japon s'ouvrit au Japon,* p.91,Gallimard, によると当時リヨンいた山田という人物は，1908年リヨンの領事となった山田忠澄（1855-1917）と推察される。彼は長崎ではレオン・デュリーにフランス語を習い，その後リヨンに行きギメの研究に協力した。

25 «Cours de japonais», pp. 383-384, *Annales du Musée Guimet,* tome I, 1880, Paris.

26 MM. Ymaizoumi et Yamata: «Shidda, résumé historique de la transmission des quatre explications données sur le sanscrit», pp. 321-333, *Annales du Musée Guimet,* tome I, 1880, Paris,（筆者訳）.

27 明治仏教学界の先達，真宗大谷派の学僧。1876年よりオックスフォード大学に留学，1884年帰国。翌年東京帝国大学でサンスクリット学の講師，1914年大谷大学学長となる。

28 中国六朝時代の仏典翻訳家。

29 MM. Ymaizoumi et Yamata: «O-mi-to-king ou Soukhavati-vyouha-soutra, d'après la version chinoise de Koumārajīva», pp. 39-44, in *Annales du Musée Guimet,* tome II, 1881, Paris.

30 «Quelques mots sur les anciens textes sanskrits du Japon à propos d'une traduction inédite du Prajñāpāramitā-hrdaya-sūtra par MM. Paul Regnaud et Y. Ymaizoumi d'après un vieux texte sanskrit-japonais par L. de. Milloué», in *Congrès international des orientalistes,* 1883, tome2, Leide.

31 仏教用語。大乗仏教の最も重要な修行方法を六種とし，それらの完成した完全なあり方を波羅蜜と名づけたもの。

32 仏教用語。自己が修した善根の功徳を他の衆生または自己の菩提の完成のためにふり向けること。また死亡した有縁の者のために善根を修する「追善」のこと。

33 仏教の修行において重要視される特殊な集中心。